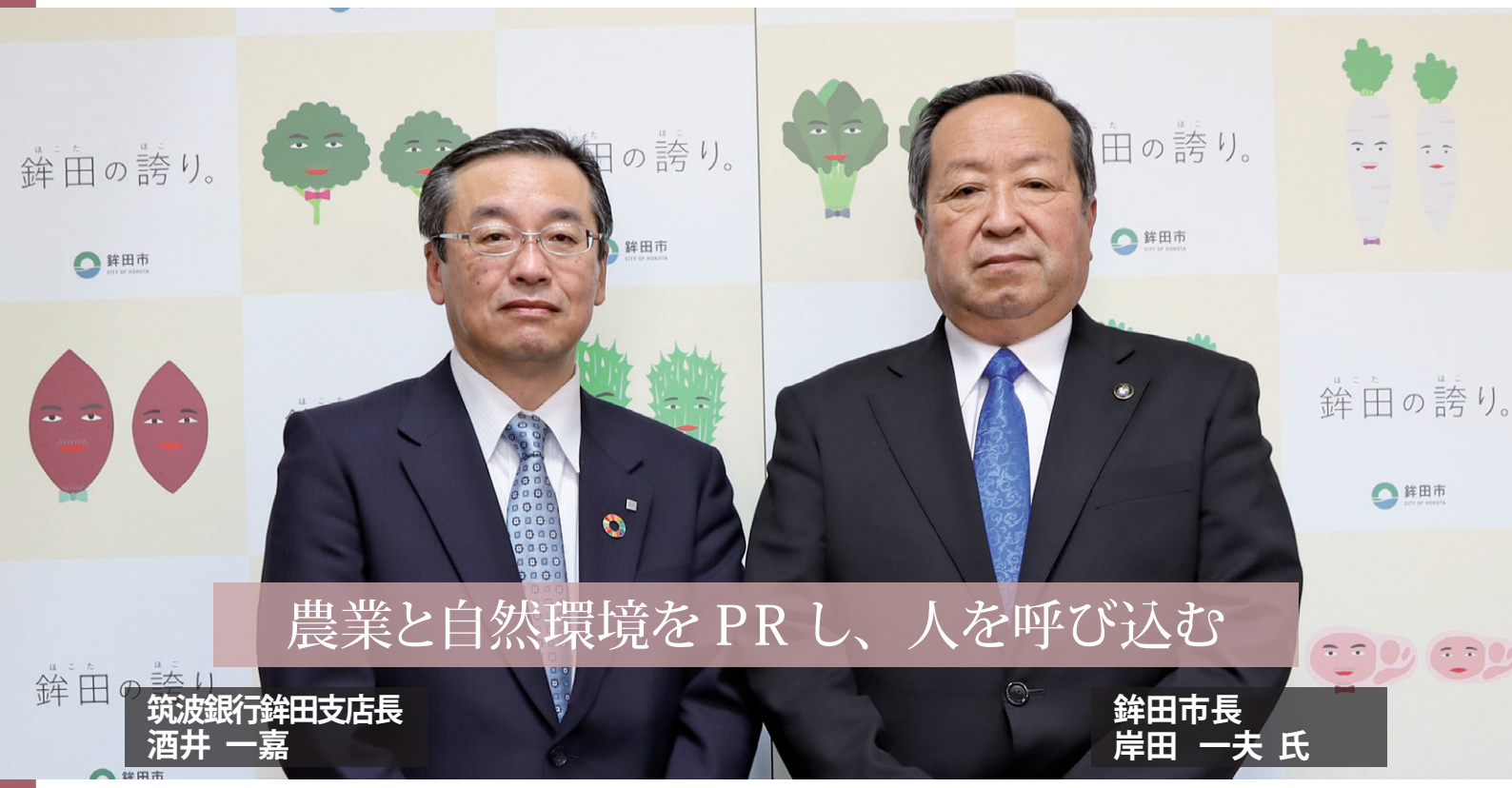
第118回　筑波銀行支店長の
「わがまち」紹介

鉾田市



農業と自然環境をPRし、人を呼び込む

筑波銀行鉾田支店長
酒井　一嘉

鉾田市長
岸田　一夫 氏

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。
「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。
今回は茨城県鉾田市です。筑波銀行鉾田支店長 酒井 一嘉が鉾田市長 岸田 一夫氏にお話を伺いました。

農業と自然環境で鉾田市をPR

鉾田市では、持続的な発展のための資源として恵まれた「自然環境」と、それを活かした「農業」という強みをPRしていく方針です。

今まで、本市のあらゆる分野についてPRしようとがんばってまいりましたが、自然環境と農業を前面に出すことにより、市の魅力を鮮明にし、国内にとどまらず、世界に向けて本市を発信していくことができると考えています。

農業振興

日本でいちばん野菜をつくるまち

本市は、東は太平洋（鹿島灘）、北は涸沼、南は北浦に囲まれた広大な大地を有し、その内陸部のほとんどが平坦地となっています。一年を通して温暖な気候に恵まれ、水はけのよい火山灰土の豊かな土壌であり、自然の恵みをいっぱいに受けた農業を営むために理想的な環境にあります。

本市は、生産農家の努力により、メロンをはじめ、いちご、トマト、ほうれんそう、かんしょ（さつまいも）、にんじん、だいこん等々、多種多様な農産物が生産される全国屈指の農業市です。

生産物の多くが首都圏に出荷され、鉾田ブランドとして消費者の皆さんに高評価を受けるとともに、首都圏の台所となっています。

農林水産省が発表する市町村別農業産出額（推計）の「野菜」区分において、2014（平成 26）年から2021（令和 3）年の8 年連続で全国第1位を誇り、2021年の野菜の産出額は340億円にのぼり、そのうちメロン（75億円）、かんしょ（142億円）が全国1位、いちご（51億円）が2位、ほうれんそう（31億円）が3位です。

まさに本市のキャッチフレーズのとおり「日本でいちばん野菜をつくるまち」を誇っています。

農業の担い手の広がり

本市の農業は、担い手の広がりによって今後もさらに発展していくと期待しています。

何世代にもわたって代々農業を営んできた農家に加え、一度本市から離れたもののUターンをして、親の代と異なる視点を持って農業に向かう若い世代の農家、さらには、本市に移住してしっかり根付き活躍している農家もいます。また、若い世代の農家には、今までの農家のイメージとかけ

離れたおしゃれな環境の中で生活し、農業に向き合っている人もいます。

一方で、農業経営を法人化し、土日を定休日にするなど労働時間の制度化を図り、「稼げる農業」を目指した新たな農家スタイルが出てきています。

具体的には、メロンやさつまいもなど何種類もの作物の栽培や、生産した作物を加工・商品化して付加価値をつけたり、季節が終わりそうでも品質を保ち価格を維持したりすることに意欲的に取り組んでいます。その取り組みの成果は、本市の農業産出額が全国トップレベルであることに表れています。

また、東関東自動車道鉾田線が開通したことで都心から1時間40分ほどで本市へ来ることが可能となり、「近い茨城・近い鉾田」が実現しました。メロンの季節には多くの人が訪れるなど、人の流れが変わったことも農業の追い風となっています。今後は、メロンだけではなく、高品質で魅力ある多くの農作物をPRし、農作物を目当てに訪れる人を増加させることによって活性化を図っていきます。

豊かな自然

サーフィンのメッカ「とっぷ・さんて下」

本市は、大洗岬から千葉県東部犬吠埼に広がる鹿島灘（太平洋）に面し、豊かな海の恵みを受けています。鹿島灘を一望できるレストランや温泉などがある複合施設「とっぷ・さんて大洋」があり、施設の目の前の海岸は「とっぷ・さんて下」と呼ばれ、一年を通じてサーフィンに適した良い波が来るため、各地からサーファーが訪れています。ここでは暗黙のルールで上級者しかサーフィンできないエリアもあるようです。

毎年6月には「波乗りほこた・メロンカップ」と銘打ったサーフィン大会を開催し、副賞に本市のメロンを提供し、鉾田の魅力を持ち帰ってもらっています。また、この大会には、サーフィンの本場である湘南から訪れる参加者も大勢いて、波の良さを賞賛してくれています。

この海岸は釣りにも適しており、朝方には海岸からヒラメやイシモチなどを一年中釣ることができ、多くの太公望たちが竿を向けています。

涸沼

鹿島灘海浜公園

鹿島灘海浜公園の整備

鹿島灘海浜公園は、茨城県が所有し、本市が指定管理者として管理している公園で、自然豊かで広大な敷地や海に面した景観を誇り、県民・市民の憩いの場となっています。

この「鹿島灘海浜公園」を観光の一大拠点として「（仮）海の駅」を整備していきます。海の駅と聞くと海産物を連想しがちですが、海産物にとどまらず、本市特産の野菜もふんだんに取り揃えた施設を考えています。

2022年度には建設のための協議を始めており、2023年度からは「海」や「農」の関係者や各種団体等を交えて構想を練っていきたいと考えています。「日本でいちばん野菜をつくるまち」鉾田市の名前を広め、人々が集うことのできる、観光の核となれるような施設のリニューアルを目指します。

そして、それを機に、この公園が本市に所在していることがすぐ分かるような「愛称」を県に要望していきたいと考えています。

涸沼湖畔の整備

涸沼が2015年にラムサール条約に登録されたことを受けて、環境省で茨城町と本市の2カ所に「涸沼水鳥湿地センター」の整備を進めています。涸沼北側の茨城町地内には、環境保全に関する展示室やレクチャールームのある展示施設を、南側の本市地内には、野鳥の観察や涸沼の眺望に適した観察施設を建設する予定です。

本市に建設予定の施設は、屋上展望スペースを有する2階建てで、エレベーターを備えています。2階の観察スペースは、腰をかけながら、ゆったりと観察できるように配慮されており、屋上からはパノラマの視界を確保し涸沼の景観を丸ごと堪能できる作りになっています。本市側からは順光となるため、野鳥の観察に大変適しています。また、市ではビオトープや四阿、遊具などを配置し多くの人に来場してもらえるような公園の整備を進めています。

涸沼に陽が差すと、湖面はまるで絵の具を流した

かのように幻想的な美しい青色になり、日の出や夕日の様子はこの世のものとは思えないほどの神々しい美しさで、ロマンを感じずにはいられません。

情報発信

メディアを活かした情報発信

メディアに対する情報発信の最大の利点は、情報が無限に広がって行くことです。例えば、新聞への情報掲載は市内の大半の人が見ています。それにとどまらず、読んだ人が話題にすることで情報はさらに広がっていきます。また、人は脚光を浴びることで、さらに一生懸命取り組もうという意欲が湧くため、メディアに取り上げられた人への効果も期待できると考えています。

本市の魅力をより多くの人に知ってもらい、「行ってみたい、住んでみたい、住んでよかった、住み続けたい」と感じてほしいとの思いから、新聞やテレビ、YouTubeでの動画配信など、様々な場面を活かし、自ら先頭に立ってPR活動を行っています。鉾田大使を務めている漫才コンビ「カミナリ」との動画は、第1弾、第2弾を制作し、ネット上に配信しています。

かつては、地元の素晴らしいものをあまりPRしてきませんでした。しかし、市職員の意識も変わりつつあり、情報発信を強化するようになりました。今後、その中心となるのは、2023年4月新たに商工観光課に設置した「シティーセールス係」です。各部それぞれに実施していた情報発信を一元的に行うことで、関係部署との連携が生まれ、市役所一丸となって取り組むことができるようになります。

情報発信から交流人口増加へ

少子化、人口減少、観光の振興など本市が抱える課題の解消には、交流人口の増加がカギになると考えています。

東関東自動車道が本市までつながったことで、農産物を買いに来てくれる人が増えてきたように、まず本市を知ってもらい、来てもらい、魅力を感じてもらうことから始め、最終的には本市に住んでもらうことを目指します。

とっぷ・さんて大洋の周辺にはサーファーたちが移住してきています。新規で就農する人たちも移住してきています。

移住してきた人たちも含め、市内在住の人たちの出会いの機会を作るために、「鉾田市出会いコーディネートセンター」を設立し、結婚を希望している人たちの背中を押していきます。

メディアの特性に応じて適切にPRを行い、注目を引き、人が来て、品物が売れ、本市に魅かれた人達が移住してくる、その人たちが新しい家庭を築く、というように全ての事柄が一本に繋がっていく、そのような取り組みを進めていきます。

子どもたちは鉾田の宝

教育なくして本市の発展はありません。私は、子どもたちは未来を担う本市の「宝」であると考えています。

子どもたちの学習を支援するツールとしてタブレット型のPCを他の自治体に先駆けて市内の小中学生全員に1台ずつ用意をしました。

それが偶然にも、新型コロナウイルスのパンデミックが始まる前だったこともあり、コロナ禍でリモート授業をせざるを得なくなった時も、問題なくスムーズに実施することができました。

本市の高齢者の方たちからも、自分たちのための政策に費用を掛けるよりも、孫子の代のために使ってほしいと言われています。

本市の人たちは皆、次の世代の子どもたちを「宝」であると親身になって考えてくれています。

私は、人間性豊かな、優しい市民の皆さんのことを誇りに思い、胸を張って自慢できる点であると思います。

筑波銀行に期待すること

筑波銀行は、本市の中心市街地に店舗を構えています。本市の中心市街地は空洞化の課題があり、公的機関ともいえる銀行が、中心市街地で営業していることは非常に心強く、大変喜ばしいことです。

また、店舗周辺はきれいに清掃がされており、季節の折々には花が植えられ、市民の目を楽しませてくれており、手入れが行き届いている様子にも感心させられます。のびのびと広い駐車場は運転の苦手な人も安心して利用でき、お祭りの際には会場として活用させてもらっています。本市の施策運営のため多方面で協力してくれていることにも心から感謝しています。

このように、筑波銀行は地域に密着し、本市活性のシンボル的な存在であり、欠かすことのできない銀行となっています。これからも、本市において今まで通り営業し、鉾田市経済を支えてほしいと心から願っています。

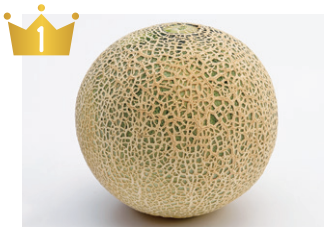
（取材日：2023年4月19日）

わがまち の 野 菜 ―鉾田市―

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。

菜果の国 鉾田　鉾田市は日本でいちばん野菜をつくるまちです

鉾田市では、おじいさん、おばあさんの時代から代々おいしい農作物をつくるために土地を耕し、水をやり、長い間様々な努力をしてきました。街のいたるところに建つビニールハウスや、青々と繁った畑で名人たちが丹精込めて育てた農作物が首都圏をはじめ全国各地に出荷され、数えきれないほどたくさんの食卓を支えています。



メロン

4月から6月頃までは「オトメメロン」、「アンデスメロン」、「クインシーメロン」、茨城県オリジナル品種の「イバラキング」などが出荷され、夏から秋にかけては「アールスメロン」が出荷されています。“毎月6日はメロンの日”という記念日が「全国メロンサミット inほこた2016」で制定されました。2021年の産出額は全国1位です。

かんしょ（さつまいも）

「紅あずま」、「紅はるか」、「シルクスイート」が主な生産品種です。10～11月頃に収穫され、キュアリング貯蔵法という一定の温度・湿度のもとで貯蔵することによりデンプンの糖化を促し、甘みを引き出すとともに、長期保存が可能となります。貯蔵技術のおかげで春先まで出荷されています。2021年の産出額は全国1位です。

いちご

鉾田市のいちごは、いちごのためだけに土づくりを行った水はけのよい畑で、ミツバチによる自然交配によって栽培されます。「畑のいちご」は水っぽさがなく深い味わいとコクがあり、量販店にとどまらず高級青果店や有名レストランまで幅広い信頼を得ています。

トマト

温暖な気候で昼夜の気温差が大きいため、酸味と甘みのバランスに優れた高品質のトマトです。5月下旬から出荷される春トマト、8月中旬から出荷される夏秋トマトがあり、“甘くて Lサイズ” が名前の由来の「あまエル」、中玉の「ちゅう太郎」など味も特徴も様々で個性的な品種が豊富に揃っています。

水菜

水菜は比較的寒さに強く、野菜不足になりがちな冬場に収穫できることからも1年中欠かせない野菜として広まっています。シャキシャキの水菜を新鮮なままお届けするために低温流通システム「コールドチェーン」を採用。徹底した品質管理がおいしさにつながっています。

ごぼう

長さ1メートル程にもなるごぼうが成育するのに適した深く水はけの良い土壌により、一大産地になっています。日本人がごぼうを食べるようになったのは江戸時代から明治時代にかけてと言われ、きんぴら、煮物，天ぷらなど多様な和食料理として定着しています。また、ごぼう茶としても愛飲されています。